令和３年（2021 年）５月 14 日 ５月定例教育委員会 報告事項イ

第５回滋賀県立高等学校在り方検討委員会の結果概要について

１　会議の日時等

開催日時　令和３年５月 11 日(火)14 時 00 分～16 時 00 分
（県庁北新館５Ｂ会議室）

出席委員　原　清治　　徳久恭子　　坂口明徳　　髙田　毅
樋口康之　　稲葉芳子　　権並裕子　　中作佳正
上原重治　　徳田　寿　　中山郁英

２　検討内容

◇将来を見据えた整理について意見交換

◇取組の方向性等について意見交換

第５回滋賀県立高等学校在り方検討委員会　会議次第

日　　時：令和３年５月11日（火）14：00～16：00
場　　所：県庁北新館５Ｂ会議室

１．開会（14:00）
　（１）第４回滋賀県立高等学校在り方検討委員会の結果概要について

２．協議
　（１）これからの県立高等学校の在り方について

３．その他

閉会（16:00）

配付資料

資料１－１	滋賀県立高等学校在り方検討委員会委員名簿	Ｐ３
資料１－２	第４回滋賀県立高等学校在り方検討委員会の結果概要について	Ｐ５
資料１－３	「これからの県立高等学校の在り方検討」について	Ｐ９
資料１－４	これからの県立高等学校の在り方について　中間まとめ（案）概要 ～（仮）『これからの滋賀の県立高等学校の在り方に関する基本方針』～	Ｐ11
資料２－１	これからの県立高等学校の在り方について　将来を見据えた整理 （これまで主な意見等）	Ｐ13
資料２－２	令和３年度滋賀県立高等学校第１学年募集定員について	Ｐ15
資料２－３	滋賀県における公立高校と私立高校の募集定員の推移	Ｐ17
資料２－４	平成20年７月設置の県立学校のあり方検討委員会における学校規模の整理	Ｐ19
資料２－５	学校規模による比較（令和２年度）	Ｐ20
資料２－６	学校規模から見た具体的な取組事例	Ｐ22
資料２－７	中学校等卒業（予定）者数と県立全日制高校募集定員の推移	Ｐ23
資料２－８	県内小学校、中学校および義務教育学校における１学年あたりの 平均児童・生徒数	Ｐ24
資料２－９	他府県での取組事例	Ｐ26
資料２－10	県立高等学校入学者選抜の概要	Ｐ34

資料１－１

滋賀県立高等学校在り方検討委員会委員名簿

任期　自：令和２年６月１日　　至：当該諮問に係る調査審議が終了するまで（概ね２年間）

区分	氏名	現職等	備考
学識経験者	原　清治（はら きよはる）	佛教大学副学長	委員長
	大野裕己（おおの やすき）	滋賀大学大学院教授	
	徳久恭子（とくひさ きょうこ）	立命館大学教授	
保護者	炭谷将史（すみや まさし）	滋賀県公立高等学校PTA連合会会長	
	坂口明徳（さかぐち あきのり）	滋賀県PTA連絡協議会理事	令和２年７月22日から
教育機関の職員	髙田　毅（たかだ たけし）	守山北中学校校長	令和３年５月11日から
	樋口康之（ひぐち やすゆき）	彦根翔西館高等学校校長	
	稲葉芳子（いなば よしこ）	三雲養護学校校長	
	権並裕子（ごんなみ ゆうこ）	学校法人松風学園学園長	
産業関係者	中作佳正（なかさく よしまさ）	株式会社ナカサク代表取締役社長	委員長職務代理
	大島節子（おおしま せつこ）	新旭電子工業株式会社代表取締役社長	
市町関係者	上原重治（うえはら しげじ）	高島市教育長	
	徳田　寿（とくだ ひさし）	愛荘町教育長	令和３年５月11日から
公募委員	中山郁英（なかやま いくえい）	公募委員	
	北山智基（きたやま ともき）	公募委員	令和３年５月11日から

資料１－２

第４回滋賀県立高等学校在り方検討委員会の結果概要について

１　会議の日時等

開催日時　令和３年２月 16 日(火)９時 30 分～11 時 20 分(大津合庁 7A 会議室)(Web 会議)
出席委員　原　清治　大野裕己　德久恭子　炭谷将史　坂口明徳　髙野裕子　樋口康之
稲葉芳子　権並裕子　中作佳正　今宿綾子　中山郁英　石野沙恵

◇これからの県立高等学校の在り方について
・中間まとめ（素案）

２　委員からの主な意見

■再編計画の総括について

①	彦根翔西館高校では、再編計画の中で学校の特色や特徴がかなり明確な形でスタートしたため、学校の運営がしやすく、入学した生徒の満足度も比較的高い。
②	「地域」という表現に少し引っかかる部分がある。地域住民が高校を支えるのか、県が市町もしくは市町教育委員会と連携するのか、いろいろなパターンがある。特に最終段落に、「地域との連携・協働における高校の魅力化策についても検討していく必要がある」とあるが、その魅力化政策を打ち出せるのは、地域住民からの声を行政側が拾って、もしくは高校側が拾ってということもあるので、もう少し丁寧に書いたほうが良いのではないか。
③	冊子全般につながることだが、高校の再編計画となると、地域の問題が出てきた際には、市町及び市町教育委員会との連携が重要になってくる。これからの高校再編を考える場合、自治体間の連携なしに高校の活性化は難しいのではないか。そういう行政的な視点の部分も少し組み込んだ方が良いのではないか。
④	瀬田工業高校では、学校運営協議会の委員に小学校の校長先生や地元の自治会長も入っている。また、ボランティアサークルの生徒が子供たちのためにロケットを飛ばしたり、焼き芋焼き器をつくり、小学校に出前授業をしたりといったことも既に行っている。
⑤	日野町は日野高校と連携協定を締結しており、インターンシップやボランティア等、生徒は地域の中で活動してくれている。今後も高校生と地域課題とのマッチングをしていきたい。地域の将来像を描く中で、地元自治体と高校が情報共有や意見を出し合うことは、総合学科の高校における教育につながっている。
⑥	地域づくりはこれからの高校づくりに欠かせない視点であり、双方向の議論があるべき。

■滋賀の県立高校づくりのコンセプトについて

①	「『滋賀』に学び、『滋賀』で学ぶ」というコンセプトは素晴らしいと思う。ものづくりの滋賀であり、そういう県の魅力は教育資源になる。
②	企画作業部会では、「全県一区制度は滋賀の強味」という意見があったとのことだが、その通りだと思う。生徒にとって滋賀県全体から高校を選択することができるということと、地域で育てる。そのあたりのところがもう少し書かれていると良いのではないか。
③	全県一区制度を前提に普通科の特色化を考えていく必要がある。コンセプトの中に全県一区が前提ということをわかりやすく書き込むべき。
④	1「滋賀」に学ぶ、の４つ目の◎に生徒数減少への対応とあるが、生徒数減少は学びそのものではないので、その下の1と2を支える環境整備のところに、「人口変動に対応した学校づくり」として置く方が良いのではないか。
⑤	コンセプトに郷土愛に関する記述がないことが気になった。定住を促す教育など、「滋賀に住み続ける人材を育成する」というようなことがコンセプトに入ると良いのではないか。

■探究活動について

①	ほとんどが大学進学希望者の普通科の生徒達が、探究の時間を使って、中小企業までわざわざ見学に来ることがある。素晴らしい取組だと思う。ぜひ継続してほしい。
②	新しい学習指導要領では総合的な探究の時間が設けられており、全ての学校で探究に取り組んでいる。２月 14 日に探究的な学習の研究発表会をオンラインで開催した。普通科だけでなく、工業高校からも水質調査等の発表があった。そのような専門高校そして普通科が互いに探究の成果を発表し合う取組も行っており、充実、拡大が大切と考えている。
③	どこの学校を卒業したかよりも、何ができるか、学んだことを社会でどう生かすかということが大切であり、知識詰め込みではなく探究活動が非常に大事だと思う。探究活動を進めていく中で、産官学に加えて地域との連携は非常に大切。現地調査では高校が塾と連携しているという話を伺い、時代が変わってきたのだなと感じた。
④	探究学習を通し、知ること、世界が広がっていくことの楽しさに気づくことは大事。そんな中、保護者は高校の当事者であり、地域住民としての当事者でもある。子どもを預けっぱなしや学校への要求ばかりではなく、教育に関与することができればかなり戦力になるのではないか。中間まとめ素案の「地域」という文言の中には保護者も含まれるだろうが、どうかかわるかが重要。

■キャリア教育について

①	キャリア教育の充実や普通科の特色化は必要である。安曇川高校の総合学科にはロボティクス系列ができて良いと思う。教員や生徒が異なる学科の学校間を行き来するようなキャリア教育があると良いと思う。
②	学校の魅力化としては、滋賀らしい、高校生を支えるしくみとして、例えば、先生も学校間を行き来できるなど自由度を高めることもあると良い。
③	大学との連携について、県内大学だけでなく一定数が進学している京都の大学とも連携し、大学卒業後、滋賀に戻って住んでいただける、仕事をしていただけるというところまで考えてほしい。就職は県外でとなると地域の活性化ということにつながらない。

■普通科の特色化について

①	普通科の特色化とあるが、普通であるのに特色を持つというのは言葉的に矛盾しているようでわかりにくい。普通科自体をなくして、例えば進学を目指すのであれば特進科とするのも一つの方法ではないか。県外に進学する生徒を滋賀に戻そうとすると、特進科という名前を広げて打ち出していくということも考えられる。
②	優秀な生徒を育てることは大事ではあるが、偏差値を上げるというのは作業であり、生徒の仕事ではないと思う。学校である限り、16 ページの滋賀の教育大綱にある中江藤樹先生の致良知や雨森芳洲先生の異文化との交流等の近江の心はベースとすべきであり、学ぶ作業と、学校として何を目指すのか、ということを分けて考えた方が良い。
③	普通科の特色化は理想だが、融通がきかないと、学びにくさにつながる。少なくとも学校内では、入学後の途中からの進路変更に融通がきくような柔軟性が必要ではないか。
④	不登校にしない、させないしくみが重要。

■情報発信について

①	魅力の発信に関して、瀬田工業高校の例だが、30 社ぐらいの企業の方の前で発表会をしている。そういった場は生徒にとって成長の機会となるし、地域にとっては、学校の魅力を感じる機会になる。そういうことを通した魅力発信の方法もある。
②	総合学科の高校では課題研究に取り組んでおり、その発表会に県内や近畿の総合学科の高校を招待している。学びを発表することで生徒の自己肯定感が高まる。しかし、普通科はそうしたことが少なく、外に見えない。探究の科目についての相互の発表大会等が、子供達の身の回りで行われるようになると、子供たちも真剣に高校選びができるようになり、入学後の３年間もより充実したものになると思う。

③	情報の発信について、アンケートでは、高校の情報入手が家族や親戚が多い。情報に触れる機会の確保が大切。ＩＣＴを活用したリモートの相談会や高校のＨＰの充実が必要ではないか。写真などがあり、見やすくて楽しさが伝わってくるようなＨＰにしていく必要がある。
④	中学校長会では、全県一区制度について賛成意見が多かった。ただ、北部の高校について、生徒数が減少しており、在り方を懸念する声もあった。特色をどうとらえるかが大切。特色については様々な発信方法があり、学校紹介ビデオをつくってメディアで発信していくなどの工夫が必要との意見もあった。

■教職員の育成、持続可能な推進体制の構築について

①	教職員の育成について、企業や大学との連携を進めようとするなら、社会経験をされた方の採用を増やすとか、教職員が企業で何年間か経験して戻ってくるというようなことも必要ではないか。
②	ＩＣＴ活用やギガスクールも始まる。情報端末を使って授業ができる教員の養成も急務だと思う。ＩＣＴを使える教員の雇用も必要ではないか。
③	教員の働き方改革について、教員を支える、応援する手段は必要。人的に支える部分とＩＣＴを活用することで働き方改革ができないか。
④	教員の働き方改革について、学校内のイニシアチブを考えていくと、県の事務局組織とよくつながっている事務職員の方の位置付けや、イニシアチブの発揮について書き込みが少ないのではないか。誰がイニシアチブを発揮できるかというところでは、もう少し盛り込む余地があるのではないか。また検討できればと思う。
⑤	学校現場としては、25 名から 30 名の少人数授業を実施すると非常にきめ細かく指導ができるという実感がある。少人数授業の実施は、取組の方向性に記載されている多くのことにつながっていく。予算等、様々な課題があると思うが、少人数授業を推進してほしい。
⑥	ＩＣＴを活用すると蓄積された学習履歴を分析することで、個々の生徒に最適な学習環境を提供していくことが可能となってくる。そうなると、教員の役割として、協働性をどうつくるのか、子どもの社会性をどう育てるのか学校に課せられたところであり、ＩＣＴの活用と関連して議論していく必要があるのではないか。また、それは今回の在り方の案にはぜひ盛り込んでいかないといけないと思う。

■将来を見据えた整理について

①	公教育を担う公私双方が互いに尊重し、生徒減少の課題を共有し、協調する必要がある。公立私立の募集定員を策定する時の基本的な考え方、特に私学にどのような配慮をしているのか、また、公私比率がわかるような資料を基に議論したい。
②	学校規模に応じたメリット、デメリットについて、特にデメリットについては改善の方策を考えていく必要がある。平成 20 年度の在り方検討においてどのような整理がされたのか、その整理に基づいて、1 学年 2～3 学級規模の学校と、1 学年 8～9 学級規模の学校の取組の事例も知りたい。また、京都府の北部地域ではキャンパス構想というものがあるし、福井県は少人数学級を前面に押し出して学力を保障しているような部分もある。そういう他府県の取組についても資料が欲しい。
③	地域別の県内の小中学校の規模がわかると、小さい学校がどこにあるのか、もしマップが作成できるのであれば、どういうエリアにどんな目線を向けていけばよいのかがわかる。またそれは生徒数がどう推移していくかにもつながることで、高校の学級数をシミュレーションすることができるのではないか。
④	高校の配置ということでは、県が県民に対して限られた資源でどのようにサービスしていくかという観点もあり、県が案を作成して示すという部分は抜くことはできないが、例えば、自治体レベルで高校と連携して改革していきたいという発意やイニシアチブがどのように認められ、今後に生かされていくかといったところをもう少し詰めていくと良い。

■入学者選抜について

①	入試というものは、中学校を卒業した学力があることを測るような方向にすべきではないか。その際、落第ということが起こりうるが、落第は決して恥ずかしいことではないという共通理解が必要ではないか。
②	特色選抜について、導入当初の特色選抜の意味から変化してきているのではないか。大学入試も知識の詰め込みではなく、学んだことをどう生かすか等について問う問題が増えている中、高校入試ももっと斬新な改革が必要ではないか。
③	スポーツ・文化芸術推薦選抜に関して、特別な種目等について、中学校の教育課程外の活動をもって校長が推薦しなければならないことがある。この部分は更なる検討が必要ではないか。
④	入試制度に関しては、現行の滋賀県の入学者選抜の制度がどういう内容なのかわかる資料を準備してほしい。

■高等専門人材育成について

①	カの職業系専門学科・総合学科の特色化・高度化に関連して、滋賀県には高等専門学校が必要ではないか。「学生のため」を第一に、どこにどのようなものをつくればよいのか、企画を練っていただきたい。また、県内にある職業能力開発短期大学校も高度化のために活用できるのではないか。
②	高等専門学校について、知事部局の議論と連携とあるが、高校と同じく中学校卒業生を対象とした学校で関連性がある。今後どのような議論や連携がなされていくのか。 → 現在知事部局を中心に検討しており、来年度予算で調査検討をしていくことについて議会に提案されている。県立高校の在り方検討でも特に産業教育の関係で非常に関連性があり、議論の状況や方向性などについて、検討委員会でも随時報告したい。

■その他

①	ＳＤＧｓのマークが１つあるが、全体に流れているものを見ていると、まちづくりや健康など、もっといろんな観点があるのではないか。
②	ＳＤＧｓについては、17 番のパートナーシップで目標を達成しようという項目も加えたらどうか。
③	基本方針策定後の進め方で、必要に応じて地域別協議会を設置とあるが、必要に応じてとはどういう想定をしているのか。 → これからの議論になるところでもあるが、地域の中における高校の在り方について温度差がある部分もあり、全ての地域で同時に地域別協議会をつくるというのではなく、必要になったところからというイメージで、必要に応じてと記載している。
④	企画作業部会会議で、県立高校の校長先生に、自分の学校の将来についてどんなアイデアや構想等があるのか聞いてほしいというリクエストをしたがそのことについて進捗はどうなっているのか。 → 今回の中間まとめを示し、それぞれ各学校の考えるアイデアや構想を聞き取っていきたい。アイデア段階ということもあり、グループ化する等、出し方については工夫したい。
⑤	次回の 5 回目の検討委員会では、具体的な取組についての議論と将来を見据えた整理の 4 点についてさらに考えていきたい。

資料１－３

「これからの県立高等学校の在り方検討」について

１　「これからの県立高等学校の在り方検討」の背景等

○平成 24 年度に滋賀県立高等学校再編基本計画および同実施計画（以下、「再編計画」）を策定し、基本計画の計画期間を概ね 10 年として魅力と活力ある学校づくりを実施

○人口減少、少子高齢化の進行やグローバル化、情報化、技術革新の進展など、急速に社会情勢が変化するなかで、滋賀の高等学校教育の一層の推進を図るためには、再編計画の検証と全県的視野での県立高等学校の在り方の検討が必要

２　検討の進め方

（１）基本方針の策定

○令和２年度から再編計画の検証とこれからの県立高等学校の在り方の検討を開始

→令和３年度末に（仮）「これからの滋賀の県立高等学校の在り方に関する基本方針」（以下、「基本方針」）を策定

【策定趣旨】概ね 10 年から 15 年先を見据えて、新しい時代を切り拓く人づくりのため、県立高校の在り方について、全県的視野で基本的な考え方を示す

【対象期間】令和４年度から令和 13 年度の 10 年間

○「滋賀県立高等学校在り方検討委員会」（以下、「検討委員会」）を設置し検討

・県立高校の在り方について検討委員会に諮問し、答申を踏まえて基本方針を策定

・生徒・保護者アンケート、学校関係者や地域（市町長等）の意見聴取、県民政策コメント等

・議題に応じ、産業教育審議会等の意見を踏まえ、検討

（２）具体的な取組の検討、実施

○令和４年度以降、基本方針に基づき、全県的視野での魅力化の具体策の検討や実施

※　必要に応じて、地域の関係者等で構成する（仮）地域別協議会を設置し、地域の意見を踏まえて、個別の計画を策定、実施

３　これまでの検討の経過

○教育・文化スポーツ常任委員会

令和元年 12 月 16 日「これからの県立高校の在り方検討」の進め方について

令和２年６月８日　「これからの県立高校の在り方検討」について　（検討委員会諮問等）

７月 10 日　「これからの県立高校の在り方検討」について　（第 1 回検討委員会結果等）

９月１日　「これからの県立高校の在り方検討」について　（基本方針骨子イメージ案）

令和３年２月 10 日　「これからの県立高校の在り方検討」について　（中間まとめ（素案））

３月９日　「これからの県立高校の在り方検討」について　（中間まとめ（案））

○検討委員会

令和２年６月９日　第１回：これからの県立高等学校の在り方について（諮問）　等

８月３日　第２回：再編計画の実施状況、県立高校の目指す姿、取組の方向性　等

８月 31 日　第３回：取組の方向性、骨子イメージ案　等

11 月 20 日　企画作業部会：現地調査（石山高校、守山北高校、愛知高校、能登川高校）

令和３年１月 15 日　企画作業部会会議：中間まとめ（たたき台→素案）

２月 16 日　第４回：中間まとめ（素案→案）

○アンケート、意見聴取等

令和２年 10 月～11 月実施（骨子イメージ案）

・市町立中学校等、県立高等学校の生徒および保護者へのアンケート

・大学生等（令和 2 年度滋賀の教師塾入塾者）、市町首長（市長会、町村会）、市町教育長、市町立中学校等校長、県立学校校長、副校長、教頭、県立高校教諭等（中堅教諭等資質向上研修対象者）への意見聴取

令和３年３月～５月実施（中間まとめ（案））

・市町首長（市長会、町村会）、県立高校立地市町企画部門、市町教育長、市町教育委員会（県立高校以外進学関係）、県立高校長、大学、専修学校、私立中学高等学校連合会、職員団体、塾、ﾌﾘｰｽｸｰﾙ、ｽｸｰﾙｶｳﾝｾﾗｰ等への意見聴取

〇教育委員会

令和元年12月24日　「これからの県立高校の在り方検討」の進め方について

令和２年５月19日　滋賀県立高等学校在り方検討委員会の委員選任について

滋賀県立高等学校在り方検討委員会への諮問について

６月11日　第１回滋賀県立高等学校在り方検討委員会の結果概要について

７月22日　滋賀県立高等学校在り方検討委員会の委員選任について

８月19日　第２回滋賀県立高等学校在り方検討委員会の結果概要について

９月４日　第３回滋賀県立高等学校在り方検討委員会の結果概要について

12月22日　滋賀県立高等学校在り方検討委員会企画作業部会の現地調査の概要について

令和３年１月18日　滋賀県立高等学校在り方検討委員会企画作業部会会議の概要について

３月19日　第４回滋賀県立高等学校在り方検討委員会の結果概要について

これからの県立高等学校の在り方について　中間まとめ（案）

５月14日　第５回滋賀県立高等学校在り方検討委員会の結果概要について（予定）

〇産業教育関係

・教育・文化スポーツ常任委員会

令和２年10月２日　滋賀県産業教育審議会について

令和３年２月10日　これからの産業教育の在り方について（滋賀県産業教育審議会）

・滋賀県産業教育審議会

令和２年10月29日　これからの産業教育の在り方について（諮問）　等

11月27日　現地調査（彦根工業高校、長浜北星高校、長浜農業高校）

12月23日　各学科における課題、実態等、Society5.0社会に対応した人材育成

地域や産業界との連携、環境整備、魅力を伝える方策

・教育委員会

令和２年10月16日　滋賀県産業教育審議会委員の選任について

滋賀県産業教育審議会への諮問について

12月22日　滋賀県産業教育審議会第１回会議　会議概要（案）

滋賀県産業教育審議会 産業教育施設・設備 学校見学会 結果概要（案）

２月５日　滋賀県産業教育審議会第２回会議　会議概要（案）

４　全体スケジュール（予定）

令和３年度　５月11日　第５回検討委員会

６月頃　第６回検討委員会

７月頃　第７回検討委員会：答申（素案）

（５月～７月頃　第３回～第５回産業教育審議会（第５回で答申（案））

10月頃　第８回検討委員会：答申（案）

12月頃　基本方針（原案）策定

令和４年１月頃　県民政策コメント実施

令和４年３月頃　基本方針策定

令和４年度以降　基本方針に基づき、具体的取組の検討、実施

※県議会には適宜報告

資料１－４

これからの県立高等学校の在り方について　中間まとめ（案）概要

～（仮）『これからの滋賀の県立高等学校の在り方に関する基本方針』～

令和３年２月
滋賀県立高等学校在り方検討委員会

背　　景　○人口減少、少子高齢化、グローバル化、情報化、技術革新の進展などの急速な社会情勢の変化への対応

策定趣旨　○概ね10から15年先を見据えて、新しい時代を切り拓く人づくりのため、県立高等学校の在り方について、全県的視野で基本的な考え方を示す

対象期間　○令和４年度から令和13年度の10年間

これまでの主な高校改革

Ｈ９～総合学科設置(国際情報・長浜北星等)
H15　県立中高一貫教育校設置
H18　県立普通科高校通学区域全県一区制
　　→主体的高校選択の進展　(H28検証)
H24　県立高校再編計画策定
Ｒ２　国際バカロレア設置（虎姫）
Ｒ３　湖西地域の県立高校魅力化
　　（高島・安曇川学科改編）

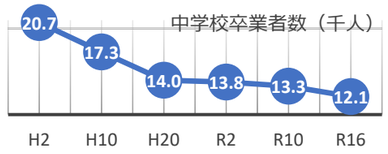
現行再編計画の総括

○統合新校設置（長浜北・彦根翔西館）
　・学校統合により地域全体の学校活力向上
　・社会性の涵養、部活動の活性化
○総合単位制高校設置、職業系専門学科改編等
　・不登校傾向が改善し卒業
　・分かりやすい学科体系、地域連携強化
○全県一区制度のもと、国や県の指定事業等の活用や地域、大学等との連携による魅力ある学校づくりの一定の進展
□普通科高校や人口減少地域の学校の更なる魅力化、発信力の強化が必要
□計画策定過程で地域との双方向の議論が必要

県立高校をとりまく現状と課題

◆生徒数の減少

・H2.3卒のピークから▲7,000人34%減
・R16.3卒は更に▲1,700人 H2.3卒から42%減



◆社会情勢の変化

・少子高齢化、人口減少社会の到来
・第４次産業革命、Society5.0
・グローバル化
・withコロナ、afterコロナと新しい生活様式

◆国の動き

・学習指導要領改訂（令和４年度～）
　社会に開かれた教育課程、主体的・対話的で深い学び
・新時代に対応した高等学校教育の在り方検討

◆特別な教育的支援が必要な生徒の増加

・中学校の特別支援学級から高校へ進学する生徒増加(H20(13%)→H30(54%))
・高校で特別な教育的支援が必要な生徒の割合は増加傾向（H22(2%)→R1(5%)）

将来の社会の姿

◇人口減少と高齢化の更なる進行
◇第4次産業革命を通じたSociety5.0の実現
◇大規模災害などの発生リスク
◇コロナ禍を経た新しい生活様式の定着
◇持続可能な社会の実現（SDGs）
◇多様な価値観が尊重される社会　　等

想像はできるが 予測できないことが起こりうる

高校への希望や期待

～アンケートや意見聴取から～

◇生徒の立場から　<中高生7,688人回答><大学生等>

・文武両道に励みたい
・将来のことをじっくり考えたい
・校舎をリニューアルしてほしい
・生徒や先生が団結できる行事があるとよい
・ｲﾝﾀｰﾈｯﾄを活用した授業を増やしてほしい　等

〈県立高校１，２年生〉
○在籍している高校の満足
　満足82%（友人関係、部活動、授業）
　不満18%（授業、校風、施設・設備）

◇保護者の立場から　<保護者6,894人回答>

・子供の可能性を拡げてやりたい
・基礎から学べるようにしてほしい
・学力向上だけでなく、人間性を高めてほしい
・オンライン授業等に力を入れてほしい　　等

〈中学１，２年生保護者〉
○子供に進学させたい高校
　県立高校88%　県内私立高校4%
○高校に期待すること
　自分の進路希望や興味・関心等に応じた科目選択ができる63%

◇地域社会の視点　<市長会、町村会、市町教委等>

・地域活性化に貢献する生徒を育ててほしい
・地域にとって高校の存在は大きい
・在り方検討で高校再編とせず、地域の声を聴いてほしい　等

◇産業界の視点　<県内企業関係者等>

・専門的に教育して、高校卒業してすぐに社会に役立つ人材を育ててほしい
・企業等と連携することが必要　　等

◇教職員の立場から　<中学校・高校管理職、中堅教諭等>

・人間性を高めるため、授業はもちろん、部活動や学校行事も大切にし、いろいろな経験ができる教育活動を工夫したい
・一定の規模で教員数も充実した状況が必要　等

これからの滋賀の県立高校の在り方に関する基本的な考え方

本県教育の教育理念	未来を拓く心豊かでたくましいひとづくり
育成すべき生徒像	生きる力（自立する力・伝える力・協働する力・創造する力等）がある
高等学校の役割	・生きる力を育む場 ・好奇心や探究心を更に発展させる場 ・「答えを見つける」から「課題を見つけて解決に向けて考え行動する」教育の場へ
魅力化の視点	◎多様性のある社会、人口減少社会への対応を、小・中・高・大・社会の連続性の中で捉え、ＩＣＴを活用し、持続可能な形で実施する ◎森・川・里・湖が水系でつながり、近江の心が根付いた「滋賀」ならではの学び、それぞれの県立高校でこその学びを地域とともに推進する

目指す姿　■高校別　◆県域全体

①生徒が自ら主体的に学び「生きる力」をつけることができる
　→◇すべての生徒に自分を高める学びが提供されている
　→◇多様な人との出会いやコミュニケーションを通じて深め発見できる学びが提供されている
②生徒が世界につながり活躍するための力をつけることができる
　→■グローバル人材や科学技術人材が育成されている
　→■大学等と連携した高度な専門的学びが提供されている
　→◇ＩＣＴを活用した対話的・協働的な学びが実現できている
③生徒同士が切磋琢磨し成長できる
　→■学校行事や部活動が活性化している
　→◇学校でこそ育まれる人と人とのつながりを意識した場が提供されている
④場所や時間を選ばない学びができる
　→◇ＩＣＴや外部人材を活用し、所属する学校の枠にとらわれない柔軟で多様な学びが提供されている
⑤生徒が社会から学び自らの進路を考えることができる
　→■地域の教育資源や人々と関わる学びが提供されている
　→■産業界と連携した学びが提供されている
⑥障害のある者とない者が互いに学び合い互いを尊重できる
　→◇共生社会の実現に向けた教育が着実に進んでいる
⑦生徒が自らに合った学びを選択できる
　→■それぞれの県立高校ならではの魅力や特色が人々に理解されている
　→◇県内のどの地域でも様々な学びが提供されている
　→■基礎学力充実、不登校、日本語学習等に対応する学びが提供されている
⑧教職員が生徒一人ひとりに愛情をもって向き合いサポートできている
　→◇授業改善が進むとともに教職員自身の人間性や創造性を高め効果的な教育活動ができている

滋賀の県立高校づくりのコンセプト

多様な生徒一人ひとりが、「滋賀」という地域から学び、
社会の一員としての自立を目指す学校づくりを進める

1　「滋賀」に学ぶ

滋賀の自然、歴史、文化、人、産業等を教育資源とした学びの充実

◎知識・技能を活用し課題を解決する確かな学力の育成
◎自立した社会人を育てるキャリア教育の充実
◎生徒の学ぶ意欲を育むための多様な学習ニーズへの対応

1 と 2 を支える環境整備

◎多様な学びの提供や人と人のつながりの創出等、生徒数減少への対応
◎多様な学びを実現するＩＣＴを活用した教育の提供
◎生徒の学びを支援し、自ら学び続ける教職員の育成
◎持続可能な推進体制の構築

2　「滋賀」で学ぶ

魅力と活力ある取組を明確にし、見える化する学校づくり

◎普通科の特色化(全県一区制度継続)
（普通科系専門学科を含む）

普通科 全日制 29/44校 → 普通科 / 普通科 ○○科 / 普通科系専門学科 → コース類型 / 総合学科 系列
普通科系専門学科

◎職業系専門学科等の特色化・高度化

職業系専門学科 総合学科 → 職業系専門学科 総合学科 → 類型 系列

◎定時制/通信制の役割への対応

オンリーワンの学校づくり ↓ 魅力発信

取組の方向性

ア　確かな学力の育成
　→「主体的・対話的で深い学び」の実現を目指した授業改善　　［目指す姿①⑧］
　→「読み解く力」の育成　［①］
イ　キャリア教育の充実
　→小中学校での学びの連続性、高校卒業後の進路との接続、地域の教育資源の活用を意識した体系的・系統的なキャリア教育の推進(キャリアパスポート活用、連携コーディネーター配置、コンソーシアムの構築、学校運営協議会の設置、外部人材活用等)　［①⑤］
ウ　多様な学習ニーズへの対応
　→特別な教育的支援を必要とする生徒への指導の充実（通級指導等）　［⑥］
　→不登校生徒支援、日本語指導が必要な生徒対応の充実　［⑦］
　→基礎学力充実のための取組の工夫　［⑦］
エ　普通科の特色化（普通科系専門学科を含む）
　→新しい学科やコース、類型の例 ： 地域探究、学際融合、環境科学、ｽﾎﾟｰﾂ科学先端科学、環境防災、ﾃﾞｰﾀｻｲｴﾝｽ、歴史観光、保育、地域貢献　等［①②③⑤⑦］
　→総合学科、普通科系専門学科への改編　［①②③⑤⑦］
　→普通科系専門学科（音楽・美術等）の学びを継続するための工夫　［⑦］
　→高校の特色のＰＲ（ＨＰや動画配信等の充実、学習成果の発信等）　［⑦］
オ　職業系専門学科・総合学科の特色化・高度化（滋賀県産業教育審議会議論）
　→新しい時代に対応した学びの提供や必要な産業分野で力を発揮できる人材育成　［①②③⑤］
　→職業系学科の魅力を伝える方策　［⑦］
　→施設・設備の充実、外部資源の活用　［⑤］
カ　定時制/通信制の役割への対応
　→多様な生徒の進路保障等を見据えた学びの場の提供　［③⑦］
キ　生徒数減少への対応
　→地域と連携・協働した学校づくり（地域とともに目指す姿を具体化）　［⑤⑦］
　→多様な学びを実現するための少人数学級の工夫　［⑦］
　→学校行事、部活動等の学校間連携や地域連携についての研究　［③］
ク　ＩＣＴ活用
　→すべての高校でＩＣＴ教育環境の充実・更新　［①④］
　→ＩＣＴ活用のコンテンツ等の共有化　［①④］
　→教職員のＩＣＴ活用力を高める研修の充実　［①⑧］
ケ　生徒の学びを支援し、自ら学び続ける教職員の育成
　→人材の確保、研修の充実　［⑥⑧］
コ　持続可能な推進体制の構築
　→地域と連携・協働した学校づくり（連携コーディネーター配置、コンソーシアムの構築、学校運営協議会の設置等）　［①⑤］
　→働き方改革の推進、経営方針の明確化　［⑦⑧］

※　モデル校指定等による取組内容の研究・実践
※　高等専門人材育成に関しては、知事部局における議論と連携

将来を見据えた整理

○県立高校の役割/私学との関係（生徒減少時代の公私の在り方等課題共有）
○学校規模に応じたメリット、デメリット(生徒の活動、学校経営等)
○将来に向けた議論の必要性(生徒数の推移見込みと想定学級数等)
○現行入学者選抜に関すること

(参考)基本方針策定後の進め方（案）

１　基本方針に基づき（仮）魅力化プラン作成（たたき台→意見聴取→案作成）

〈県教育委員会〉
全県的視野からの学校配置の提示
　・多様な選択肢の提供
　・特徴的な学科等の配置
※必要に応じて（仮）地域別協議会の設置
（将来を見据えた検討→プランに反映）

〈学校〉
各校の目指す姿の検討
　・教職員による主体的な具体化策検討
　・中学校や地域との意見交換や先進事例の研究等

２〈県教育委員会〉個別の実施計画作成
　・（仮）魅力化プラン案に基づき対象校を選定
３〈学校〉個別の実施計画に基づく具体的検討と経営方針策定・公表
　・経営方針（生徒育成方針、教育課程・実施方針、生徒募集方針 等）

※今後、在り方検討委員会や産業教育審議会の議論や議会、市町、学校関係者の意見等により内容更新

資料２－１

これからの県立高等学校の在り方について

将来を見据えた整理（これまでの主な意見等）

１ 県立高校の役割/私学との関係（資料２－２・２－３）

＜中間まとめ（案）＞

県立高校と県内私立高校は本県の公教育の充実と発展をともに担っており、県立高校はこれまでから必要に応じて高校改革を実施し、県内私立高校は独自の建学の精神にもとづき特色ある教育を実施している。今後の生徒数が減少していく時代において、公立・私立高校の在り方等について、互いに課題を共有し方向性についての検討が必要となる。

＜これまでの主な意見＞

〇公立と私立と両方で、それぞれ特色があって、子供達が選べるような学校となることが必要。（第１回）

〇湖北、湖西、甲賀は県立高校がカバーしている。また、工業など産業系の高校は県立のみ。人口減少があっても周辺部や産業系の学びは県立が担わないといけない。一方、都市部の県立高校普通科は、魅力をどのようにつけるか、私学との関係を踏まえて整理する必要がある。（第３回）

〇滋賀県は公立と私立の垣根が低いように感じる。公私で一つのテーマでコンソーシアムをつくり交流できる可能性もある。切磋琢磨のレベルアップのためには恵まれた状況ではないか。（第３回）

〇公教育を担う公私双方が互いに尊重し、生徒減少の課題を共有し、協調する必要がある。公立私立の募集定員を策定するときの基本的な考え方、特に私学にどのような配慮をしているのか、また、公私比率がわかるような資料を基に議論したい。（第４回）

２ 学校規模に応じたメリット、デメリット（資料２－４・２－５・２－６）

＜中間まとめ（案）＞

現在の県立全日制課程の 44 校は１学年あたり２学級から９学級（令和３年度滋賀県立高等学校募集定員）の学校規模となっており、その規模に応じた生徒の活動や学校経営等の現状を踏まえてメリット、デメリットを整理しておく必要がある。

＜これまでの主な意見＞

〇リモート教育を始めると、小規模校とか大規模校とか関係なくなるのではないか。また、ＩＴだとか STEAM 教育は、専門家の優秀な先生が、全県の高校生たちに同一の勉強を教えるということにすると、高校の規模は、関係なくなる。（第２回）

〇学校規模が大きいということは、学校活力を生む原動力であるが、大きな規模と小さな規模の学校どちらもあってよいのではないか。学校のサイズ感を統一する必要はないのではないか。（企画作業部会会議）

〇学校規模に応じたメリット、デメリットについて、特にデメリットについては改善の方策を考えていく必要がある。平成 20 年度の在り方検討においてどのような整理がされたのか、その整理に基づいて、1 学年 2～3 学級規模の学校と、1 学年 8～9 学級規模の学校の取組の事例も知りたい。また、京都府の北部地域ではキャンパス構想というものがあるし、福井県は少人数学級を前面に押し出して学力を保障しているような部分もある。そういう他府県の取組についても資料が欲しい。（第４回）

３ 将来に向けた議論の必要性（資料２－７・２－８・２－９）

＜中間まとめ（案）＞

10 年から 15 年先の生徒数の推移見込みにより想定される学級数をもとに、社会の変化や地域の状況も踏まえた県立高校の在り方を検討する必要がある。

＜これまでの主な意見＞

○様々な選択肢の中で、キャリア形成を図り、地域に貢献する人材を育成することが、人口減少を抱える地域にとっては、大きな魅力づくりの方策ではないか。（第２回）

○学校現場としては、25 名から 30 名の少人数授業を実施すると非常にきめ細かく指導ができるという実感がある。少人数授業の実施は、取組の方向性に記載されている多くのことにつながっていく。予算等、様々な課題があると思うが、少人数授業を推進してほしい。（第４回）

○地域別の県内の小中学校の規模がわかると、小さい学校がどこにあるのか、もしマップが作成できるのであれば、どういうエリアにどんな目線を向けていけばよいのかがわかる。またそれは生徒数がどう推移していくかにもつながることで、高校の学級数をシミュレーションすることができるのではないか。（第４回）

４ 現行入学者選抜に関すること（資料２－10）

＜中間まとめ（案）＞

中学校等卒業者の 99%が高等学校等へ進学しており、現行の県立高等学校入学者選抜は生徒の主体的な進路選択のうえで大きな役割を果たしてきた。今後の県立高校の在り方を検討し高校改革を進めていくためには、入学者選抜に関することも検討する必要がある。

＜これまでの主な意見＞

○入試というものは、中学校を卒業した学力があることを測るような方向にすべきではないか。その際、落第ということが起こりうるが、落第は決して恥ずかしいことではないという共通理解が必要ではないか。（第４回）

○特色選抜について、導入当初の特色選抜の意味から変化してきているのではないか。大学入試も知識の詰め込みではなく、学んだことをどう生かすか等について問う問題が増えている中、高校入試ももっと斬新な改革が必要ではないか。（第４回）

○スポーツ・文化芸術推薦選抜に関して、特別な種目等について、中学校の教育課程外の活動をもって校長が推薦しなければならないことがある。この部分は更なる検討が必要ではないか。（第４回）

資料２－２

10 月 定 例 教 育 委 員 会 資 料
令 和 2 年（2020 年）10 月 16 日
高校教育課魅力ある高校づくり推進室

令和３年度 滋賀県立高等学校第１学年募集定員について

１　中学校および義務教育学校卒業予定者の状況

令和２年９月現在の中学校および義務教育学校の卒業予定者を対象とした第１次進路志望調査によると、来年３月の中学校および義務教育学校の卒業予定者は１３，２９３人となり、本年３月の卒業者数（１３，７５３人）と比較すると４６０人の減少となっている。

２　募集定員の策定に係る基本方針

（１）　高等学校教育の充実

中学校等卒業予定者数や進学志望の動向等を総合的に勘案の上、適正な定員を定め、高等学校教育の充実を図る。

（２）　高等学校再編計画の着実な実施

高等学校再編計画の着実な実施により、県立高等学校の魅力と活力ある学校づくりをめざし、学校の特色を生かした募集定員配置を進める。

（３）　県内私立高等学校に対する配慮

県内の私立高等学校は、本県の高等学校教育振興の上で大きな役割を担うものであり、その募集定員については特に留意する。

（４）　学級定員

学級定員は引き続き４０人とする。

３　県立全日制高等学校の募集定員

県立全日制高等学校の募集定員は、上記の基本方針を踏まえて、９，３２０人（２３３学級）とする。これは、令和２年度と比較して４８０人（１２学級）の減である。

【 募集定員を減らす高等学校 】

学　校　名	学　科　名	募集定員の増減
膳　　所 高等学校	普　通　科	△４０人（△１学級）
北　大　津 高等学校	普　通　科	△４０人（△１学級）
大 津 商 業 高等学校	商業学科情報システム科	△４０人（△１学級）
草　　津 高等学校	普　通　科	△４０人（△１学級）
玉　　川 高等学校	普　通　科	△４０人（△１学級）
守　山　北 高等学校	普　通　科	△４０人（△１学級）
栗　　東 高等学校	普　通　科	△４０人（△１学級）
水　　口 高等学校	普　通　科	△４０人（△１学級）
八　日　市 高等学校	普　通　科	△４０人（△１学級）
長　浜　北 高等学校	普　通　科	△４０人（△１学級）
伊　　吹 高等学校	普　通　科	△４０人（△１学級）

【 学科改編に伴い募集定員を変更する高等学校 】

学　校　名	学 科 名	募集定員の増減
高　　島 高等学校	文理探究科	＋４０人（＋１学級）
	普　通　科	△４０人（△１学級）

【 募集を停止する学科のある高等学校 】

学　校　名	学 科 名	募集定員の増減
安　曇　川 高等学校	普　通　科	△４０人（△１学級） （募集停止）
	総 合 学 科	増減なし

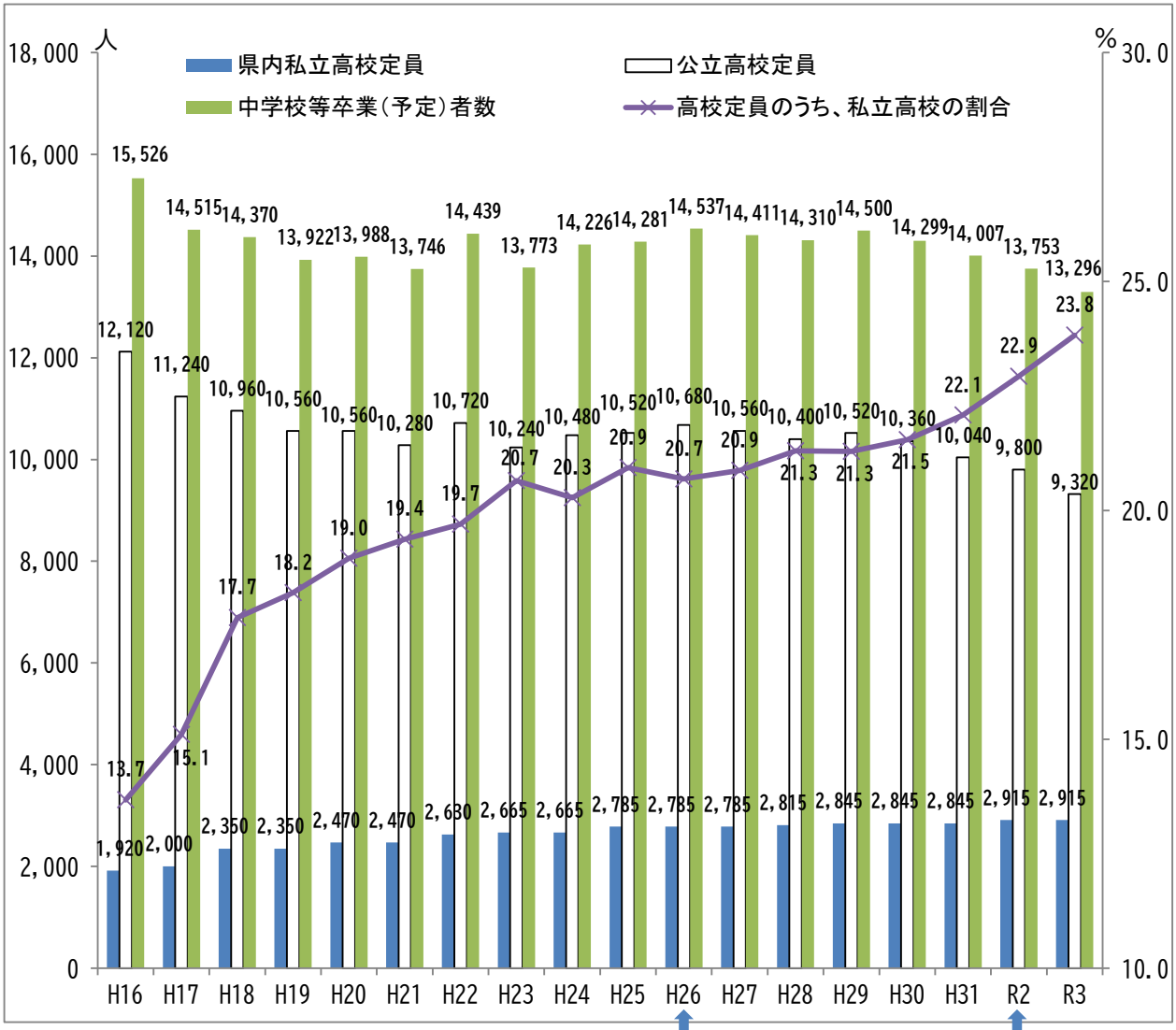
４　県立定時制および通信制高等学校の募集定員

県立定時制高等学校の募集定員は、３２０人（８学級、現行どおり）とする。

県立通信制高等学校の募集定員は、３２０人（現行どおり）とする。

資料２－３

滋賀県における公立高校と私立高校の募集定員の推移



※定員は全日制のみとし、公立はH17までは守山市立守山女子高校を含む。

公立高校授業料無償制
高等学校等就学支援金制度（私立）

私立高校授業料実質無償化
（就学支援金制度の拡充）

＜参考＞

○県内私立高校の設置等

H18	立命館守山中学校・高等学校	開校
H18	彦根総合高校	男女共学・校名変更
H20	滋賀短大附属高校	男女共学・校名変更
H20	綾羽高校	全日制課程設置
H23	近江兄弟社高校	国際コミュニケーション科設置
H24	ＭＩＨＯ美学院中等教育学校	開校
H25	幸福の科学学園関西中学校・高等学校	開校
R 2	光泉カトリック中学校・高等学校	校名変更
R 2	彦根総合高校	フードクリエイト科設置

○全国の公立高校と私立高校の募集定員の比率の状況

・２６都道府県（55.3%）は、公立高校と私立高校の募集定員の比率を策定、またはその目安を決めている。
（滋賀県私立中学高等学校連合会より聴取）

○令和２年度全日制高等学校の都道府県別・公私別の在籍生徒数

（文部科学省学校基本調査結果より算出）

	１～３年生在籍者生徒数			比率		
	合計	国公立	私立	国公立	私立	国公立高校の在籍生徒数の比率順位
全国計	3,012,708	1,997,615	1,015,093	66.3%	33.7%	
北海道	116,098	85,686	30,412	73.8%	26.2%	18
青森	31,277	23,058	8,219	73.7%	26.3%	19
岩手	30,854	24,376	6,478	79.0%	21.0%	6
宮城	55,793	39,532	16,261	70.9%	29.1%	24
秋田	21,614	19,432	2,182	89.9%	10.1%	3
山形	27,913	18,859	9,054	67.6%	32.4%	34
福島	46,804	36,485	10,319	78.0%	22.0%	9
茨城	72,617	52,101	20,516	71.7%	28.3%	22
栃木	49,735	34,692	15,043	69.8%	30.2%	28
群馬	48,426	35,684	12,742	73.7%	26.3%	20
埼玉	163,719	109,996	53,723	67.2%	32.8%	36
千葉	143,291	95,723	47,568	66.8%	33.2%	38
東京	294,750	123,045	171,705	41.7%	58.3%	47
神奈川	194,449	124,638	69,811	64.1%	35.9%	42
新潟	51,466	38,405	13,061	74.6%	25.4%	15
富山	25,619	19,885	5,734	77.6%	22.4%	11
石川	29,903	21,160	8,743	70.8%	29.2%	25
福井	20,331	14,192	6,139	69.8%	30.2%	27
山梨	22,786	16,338	6,448	71.7%	28.3%	23
長野	52,539	42,168	10,371	80.3%	19.7%	5
岐阜	51,137	40,088	11,049	78.4%	21.6%	8
静岡	91,763	60,498	31,265	65.9%	34.1%	40
愛知	185,122	125,357	59,765	67.7%	32.3%	33
三重	44,204	34,145	10,059	77.2%	22.8%	12
滋賀	36,792	29,013	7,779	78.9%	21.1%	7
京都	66,690	35,150	31,540	52.7%	47.3%	46
大阪	210,934	119,204	91,730	56.5%	43.5%	45
兵庫	127,599	93,964	33,635	73.6%	26.4%	21
奈良	32,823	23,134	9,689	70.5%	29.5%	26
和歌山	23,581	19,015	4,566	80.6%	19.4%	4
鳥取	14,174	10,744	3,430	75.8%	24.2%	13
島根	17,360	13,483	3,877	77.7%	22.3%	10
岡山	49,781	33,472	16,309	67.2%	32.8%	35
広島	67,333	44,512	22,821	66.1%	33.9%	39
山口	31,546	21,605	9,941	68.5%	31.5%	32
徳島	17,343	16,618	725	95.8%	4.2%	1
香川	25,181	18,853	6,328	74.9%	25.1%	14
愛媛	32,211	23,868	8,343	74.1%	25.9%	17
高知	16,839	11,740	5,099	69.7%	30.3%	29
福岡	122,659	70,180	52,479	57.2%	42.8%	44
佐賀	22,805	16,953	5,852	74.3%	25.7%	16
長崎	34,756	23,223	11,533	66.8%	33.2%	37
熊本	45,019	28,314	16,705	62.9%	37.1%	43
大分	29,320	20,227	9,093	69.0%	31.0%	31
宮崎	29,019	20,048	8,971	69.1%	30.9%	30
鹿児島	43,769	28,723	15,046	65.6%	34.4%	41
沖縄	42,964	40,029	2,935	93.2%	6.8%	2

資料２－４

平成 20 年７月設置の県立学校のあり方検討委員会における学校規模の整理

【今後の県立学校のあり方について（H21.3.30 報告）（抜粋）】

＜生徒側のイメージ＞

	大規模校	小規模校
メリット	・多様な科目や部活動のメニューがあり、選択肢が豊富である。 ・人間関係の組合せが多く、切磋琢磨の機会に恵まれている。	・友だちや教師全員の顔を覚えられ、人間関係を作りやすい。 ・施設・設備等に余裕があるため、制約が少なく利用できる。
デメリット	・規模が大きすぎると３年間で交流のない生徒や教師がおり、学校としての一体感を感じにくい。 ・施設・設備等の使用において制約が生じることがある。	・人間関係の組合せが少なく、固定化された人間関係に陥りやすい。 ・科目や部活動のメニューが少なく、学校行事も小規模となり、多様な学びにおいて制約がある。

＜教員側のイメージ＞

	大規模校	小規模校
メリット	・教員数が多く、多様な教育課程の編成や部活動数、顧問数の確保がしやすい。 ・多様な人間関係の組合せが可能となり、幅の広い教育活動が展開しやすい。	・生徒把握が容易なため、緊密な人間関係がつくりやすい。 ・施設・設備等でのゆとりがあり、制約なく指導しやすい。
デメリット	・教務役割や責任が縦割りになりがちで、全体的な視野から学校を見ることが難しくなる。 ・全ての生徒との関わりを持つことができず、全校的な生徒把握が困難となる傾向にある。	・教える科目の種類の増加をはじめ、校務分掌や部活動での兼務が増え、指導の負担が大きくなる。 ・学校の活動が乏しくなり、また生徒や教師の固定化した人間関係により指導の困難さが出てきやすい。

資料２－５

学校規模による比較（令和２年度）

	㋐高校（１年生10学級）	㋑高校（１年生９学級）
学科・コース数	２学科	１学科
在籍生徒数	1,271人 （うち立地市町中学校出身：52.7%）	1,149人 （うち立地市町中学校出身：51.3%）
出身中学校数	93校（17/19市町）	58校（15/19市町）
学級数	32学級	29学級
本務教員数	81人 （本務教員１人あたりの生徒数：15.7人）	66人 （本務教員１人あたりの生徒数：17.4人）
非常勤講師	8人	10人
ＡＬＴ配置日数	3.5日／週	2.0日／週
科目数	科目数（普通科）４４ うち学校設定科目１８ 古典研究　世界史探究　日本史探究 地理探究　公民探究　数学演習 ＳＳ数学Ⅰ　ＳＳ数学Ⅱ　ＳＳ数学Ⅲ ＳＳ物理Ⅰ　ＳＳ物理Ⅱ　ＳＳ化学Ⅰ ＳＳ化学Ⅱ　ＳＳ生物Ⅰ　ＳＳ生物Ⅱ 演習生物化学　演習生物地学　探究	科目数４８ うち学校設定科目９ 地理演習　世界史詳講 日本史詳講　理系数学演習 文系数学演習１　文系数学演習２ 生物演習　理科演習 生物教養
１週間あたりの授業時数	３３時間数（週３回７限）	３３時間数（週３回７限）
部活動※兼部あり　加入率	101.4%	86.7%

部活動※兼部あり　部活動数・所属人数	運動系１９部	文化系２０部	運動系１６部	文化系１０部
	・野球 45	・吹奏楽 107	・野球 43	・吹奏楽 48
	・ﾊﾞｽｹｯﾄﾎﾞｰﾙ 66	・美術 11	・ﾊﾞｽｹｯﾄﾎﾞｰﾙ 73	・美術 39
	・バドミントン 74	・書道 17	・バドミントン 66	・書道 26
	・剣道 20	・家庭（茶華道）24	・剣道 8	・茶道 32
	・ボート 112	・音楽 67	・弓道 104	・音楽 67
	・陸上競技 62	・かるた 60	・サッカー 70	・新聞 36
	・テニス 62	・応援団 46	・ソフトテニス 64	・写真 27
	・サッカー 59	・ギター 33	・陸上競技 51	・英語 14
	・卓球 42	・物理地学 22	・バレーボール 42	・放送 10
	・ソフトテニス 40	・写真 18	・卓球 41	・科学 6
	・バレーボール 38	・英語 17	・テニス 40	
	・ヨット 35	・化学 14	・山岳 28	
	・山岳 34	・文芸 14	・水泳 24	
	・水泳 33	・弁論 13	・アイススケート19	
	・ラグビー 24	・園芸 11	・ラグビー 12	
	・体操 12	・生物 10	・新体操 6	
	・馬術 14	・ＰＦＣ 9		
	・空手道 5	・演劇 8		
	・柔道 3	・放送 5		
		・新聞 3		

（学校便覧および学校案内等より作成）

	㋒高校（１年生３学級）		㋓高校（１年生３学級）	
学科・コース数	１学科３コース		１学科	
在籍生徒数	301人 （うち立地市町中学校出身：22.3%）		290人 （うち立地市町中学校出身：93.1%）	
出身中学校数	30校（10/19市町）		29校（6/19市町）	
学級数	９学級		９学級	
本務教員数	37人 （本務教員１人あたりの生徒数：8.1人）		32人 （本務教員１人あたりの生徒数：9.1人）	
非常勤講師	20人（うち芸術16人）		5人	
ＡＬＴ配置日数	0.5日／週		1.0日／週	
科目数	科目数５５ うち学校設定科目１４ 実践国語　社会人入門　基礎数学 基礎英語Ⅰ　基礎英語Ⅱ　英語総合 情報リテラシー　体育演習 地域・生涯スポーツ　舞台芸術 演奏実技　吹奏楽　音楽基礎 ソーシャルスキルトレーニング		科目数５８ うち学校設定科目２２ 国語演習　世界史演習　日本史演習 数学セミナー　数学演習　数学概論Ⅰ 数学概論Ⅱ　物理演習　生物演習 環境Ⅰ　環境Ⅱ ライフ・スポーツⅠ ライフ・スポーツⅡ コミュニティ・スポーツⅠ コミュニティ・スポーツⅡ 総合音楽　総合書道　英語演習Ⅰ 英語演習Ⅱ　生活文化 パソコン演習　情報一般	
１週間あたりの授業時数	３０時間数（毎日６限）		３０時間数（毎日６限）	
部活動 ※兼部あり　加入率	47.8%		53.1%	
部活動数 所属人数	運動系９部	文化系８部	運動系９部	文化系４部
	・野球　7 ・ﾊﾞｽｹｯﾄﾎﾞｰﾙ　9 ・バドミントン　5 ・剣道　10 ・陸上競技　11 ・ハンドボール　9 ・ソフトテニス　4 ・フェンシング　3 ・アーチェリー　1	・吹奏楽　20 ・美術　11 ・書道　4 ・茶華道　11 ・音楽　20 ・家庭　11 ・軽音楽同好会　6 ・天文科学　2	・野球　34 ・ﾊﾞｽｹｯﾄﾎﾞｰﾙ　11 ・バドミントン　4 ・剣道　7 ・ソフトテニス　25 ・バレーボール　21 ・柔道　13 ・サッカー　10 ・卓球　7	・吹奏楽　12 ・美術書道　6 ・茶華道　1 ・ﾎｰﾑﾒｲｷﾝｸﾞ　3

資料２－６

学校規模から見た具体的な取組事例

地域との連携した学び：地域活性化・地域貢献（例）

＜１学年３学級規模以下の高校＞

〇愛知高校

・３年生全員：愛荘町商工会と協定を結び、就業体験を実施

・音楽コース：定期演奏会ミュージックフェスティバルの実施

〇甲南高校

・生物と環境系列（農業）：野菜苗販売、ローストチキン製造販売、毎週３回の農産物販売等

・バイオとかがく系列（薬業）：ササユリの里づくり、親子ものづくり教室等

・食と健康系列（家庭）：ＳＰ・ＰＡや給食センターと協力して甲賀市の特産品を利用した新メニューの開発等

・福祉と保育系列（家庭）：障害者のスクールボランティア等

＜１学年６学級規模以上の高校＞

〇大津高校

・家庭科学科の生徒が中心となって地元事業に参加している。

※商店街ファッションショーへの参加、ときめき坂ハロウィンへの出店等

〇八日市高校

・美術部：八日市商工会議所青年部と協力して「East Rainbow」に参加

※近江鉄道八日市駅から東近江市役所までの通り一帯をイルミネーションで彩る事業

・書道部：東近江警察署・東近江市と協力した交通安全啓発活動の取組

大学等と連携した深い学び：特別授業・研究開発（例）

＜１学年３学級規模以下の高校＞

〇長浜農業高校

・地域伝承野菜「尾上菜」のブランド化事業への取組

※栽培のノウハウを記録したマニュアル作成・新たなレシピ開発等

※長浜市、長浜バイオ大学、滋賀県調理短期大学校等と連携

〇信楽高校

・成安造形大学の卒業制作展鑑賞、施設見学、授業体験等を実施

※Ｒ２．１２／１７に成安造形大学とパートナーシップ校提携を結んでいる。相互の教育に係る交流と連携を通して、信楽高校の生徒の視野を広げ、進路に対する意識や意欲を高めるとともに、大学の求める学生像および教育内容への理解を深め、かつ、高校教育と大学教育の活性化を図ることを目指している。

＜１学年６学級規模以上の高校＞

〇膳所高校

・ＳＳＨ指定に基づく京都大学特別授業、滋賀医科大学基礎医学講座等の事業を実施

〇彦根工業高校

・滋賀県立大学や滋賀職業能力開発短期大学校の講義を受講

・大学教授から研究指導を受けて滋賀ジュニアリサーチグラントに参加

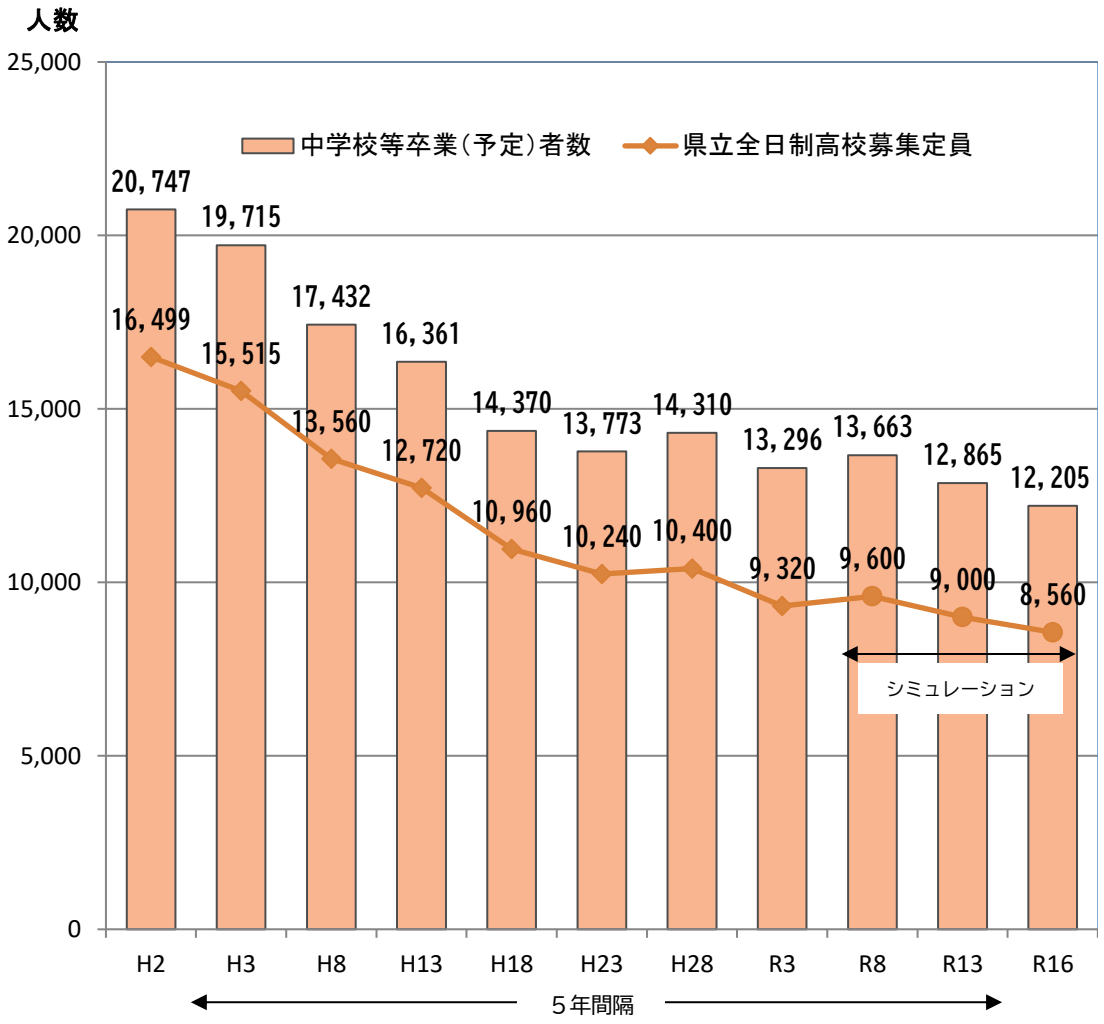
資料２－７

中学校等卒業（予定）者数と県立全日制高校募集定員の推移

（人）

入試年度	H2	H3	H8	H13	H18	H23	H28	R3	R8	R13	R16
中学校等卒業（予定）者数	20,747	19,715	17,432	16,361	14,370	13,773	14,310	13,296	13,663	12,865	12,205
県立全日制高校募集定員	16,499	15,515	13,560	12,720	10,960	10,240	10,400	9,320	9,600	9,000	8,560

※R3　中学校等卒業予定者数：R2.5/1現在の中学校および義務教育学校在籍生徒数⊠
※R8～中学校等卒業予定者数：学年・年齢が上がる際の増減数を見込んで算出
※R8以降の募集定員　　：中学校等卒業予定者数と高校の入学実績をもとに算出



資料２－８

県内小学校、中学校および義務教育学校の１学年あたりの平均児童・生徒数

○小学校および義務教育学校（在籍児童総数÷６）　（令和２年度学校便覧より）

（平均児童数） （市町）	１人 ～ 35人	36人 ～ 70人	71人 ～ 105人	106人 ～ 140人	141人 ～ 175人	176人 ～ 210人	211人 ～ 245人	246人 ～ 280人	281人 ～	校数 計 （校）	平均 児童数 （人）
大津市	10	6	10	4	5	3				38	83
草津市		3	6	4	1					14	100
守山市	1	2	1	2	1	2				9	108
栗東市		1	6	2						9	83
野洲市	2		1	3						6	83
湖南市	1	7	1							9	56
甲賀市	12	4	5							21	38
彦根市	5	6	4	2						17	62
近江八幡市	6	2	3	1	1					13	62
東近江市	11	6	3	2						22	49
旧八日市市	*1*	*4*	*2*							*7*	*62*
〃　以外	*10*	*2*	*1*	*2*						*15*	*43*
日野町	3	1	1							5	37
竜王町		2								2	58
愛荘町		2	2							4	64
豊郷町		2								2	41
甲良町	1	1								2	29
多賀町	1	1								2	34
長浜市	15	4	4	2						25	42
旧市内	*1*		*3*	*2*						*6*	*98*
旧郡部	*14*	*4*	*1*							*19*	*25*
米原市	6	2	1							9	39
高島市	8	5								13	28
全　　県	**82**	**57**	**48**	**22**	**8**	**5**	**0**	**0**	**0**	**222**	**58**

※義務教育学校１～６年生を含む

○中学校および義務教育学校（在籍生徒総数÷３）

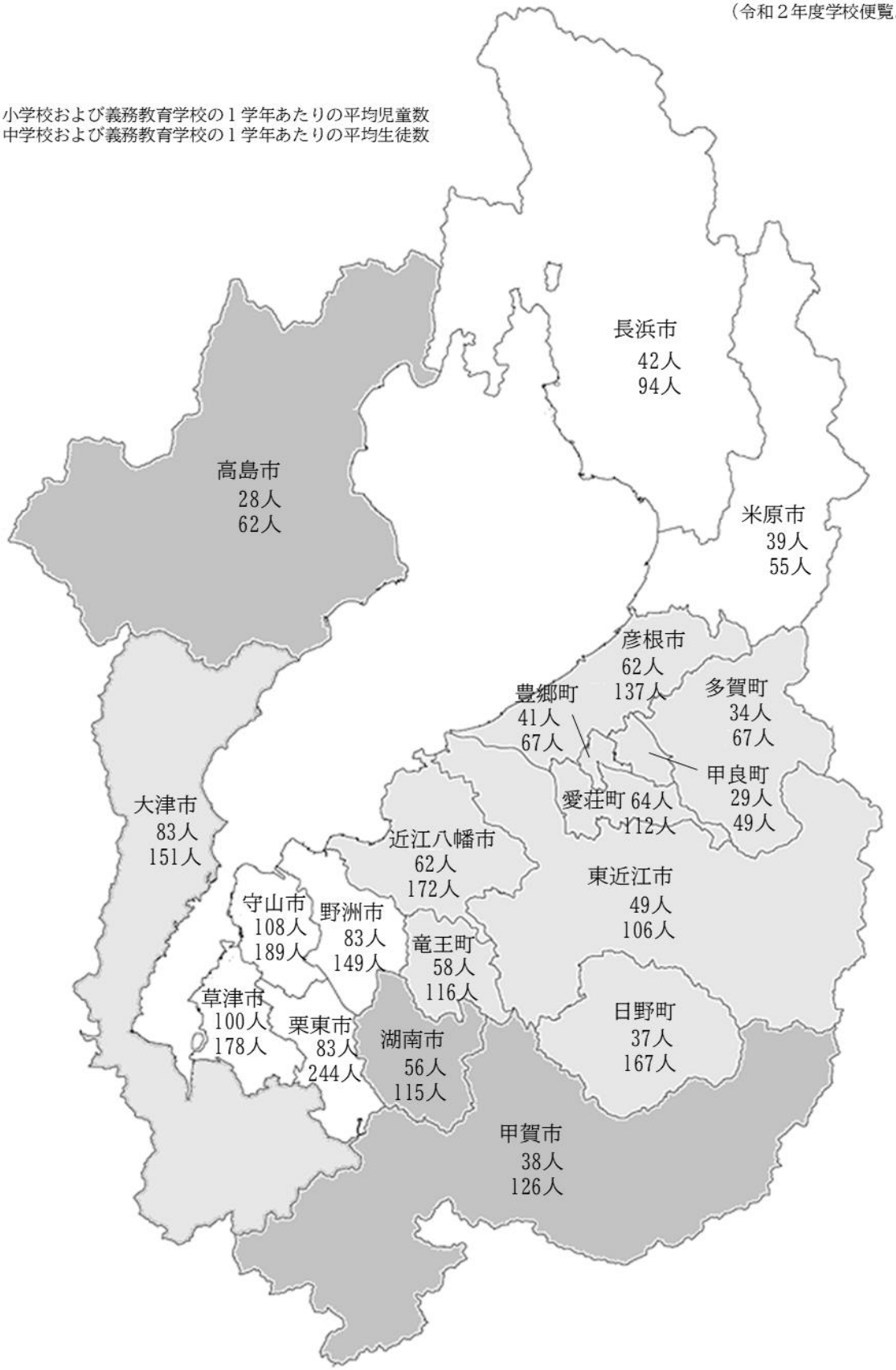
（平均生徒数） （市町）	１人 ～ 35人	36人 ～ 70人	71人 ～ 105人	106人 ～ 140人	141人 ～ 175人	176人 ～ 210人	211人 ～ 245人	246人 ～ 280人	281人 ～	校数 計 （校）	平均 生徒数 （人）
大津市	2	2	3	4	4	1		2	3	21	151
草津市		1		1	2	1	1		1	7	178
守山市			1		3		1		1	6	189
栗東市					1			1	1	3	244
野洲市				1	2					3	149
湖南市			1	3						4	115
甲賀市		1	3	1		1		1		7	126
彦根市	1		2	2	1		1	1		8	137
近江八幡市				2		3				5	172
東近江市	1	3	2	1	1		1	1		10	106
旧八日市市	*1*	*1*		*1*				*1*		4	*109*
〃　以外		*2*	*2*		*1*		*1*			6	*104*
日野町					1					1	167
竜王町				1						1	116
愛荘町			1	1						2	112
豊郷町		1								1	67
甲良町		1								1	49
多賀町		1								1	67
長浜市	2	3	3	1	2		1			12	94
旧市内			*1*	*1*	*1*		*1*			*4*	*149*
旧郡部	*2*	*3*	*2*		*1*					*8*	*66*
米原市	2	2	1	1						6	55
高島市	1	2	3							6	62
全　　県	**9**	**17**	**20**	**19**	**17**	**6**	**5**	**6**	**6**	**105**	**124**

※義務教育学校７～９年生を含む

市町別　小学校、中学校および義務教育学校における
１学年あたりの平均児童・生徒数

（令和２年度学校便覧より）

上段：小学校および義務教育学校の１学年あたりの平均児童数
下段：中学校および義務教育学校の１学年あたりの平均生徒数



資料２－９

他府県での取組事例

京都府における丹後地域の府立高校の改革

【京都府教育庁ＨＰより】

高校・学科			高校・学科（令和２年度から）			募集定員
2校	宮津高校	普通科	宮津天橋高校	宮津学舎	普通科	130
		建築科（工業科）			建築科（工業科）	30
	加悦谷高校	普通科		加悦谷学舎	普通科	80
2校	網野高校	普通科	丹後緑風高校	網野学舎	普通科	74
		企画経営科（商業科）			企画経営科（商業科）	26
	久美浜高校	総合学科 ・文理特修系列 ・教養系列 ・福祉系列 ・生産科学系列		久美浜学舎	みらいクリエイト科（特色ある専門学科）【新設】	30
					アグリサイエンス科（農業科）【新設】	30
3校	宮津高校伊根分校	普通科	清新高校（弥栄分校跡地）	総合学科【新設】		90
	峰山高校弥栄分校	農園芸科				
		家政科				
	網野高校間人分校	普通科				

丹後から未来を創る

丹後の府立高校は、高校生が、夢や希望に向かって
学び続けられるよう、これからも進化し続けていきます。

平成30年3月
京都府教育委員会

※このパンフレットは平成32年度からの丹後の府立高校の新しいカタチを説明するものであり、現在取り組んでいる内容のほか、検討中の内容を含みます。

平成32年度からの丹後の府立高校の新しいカタチ

※宮津高校伊根分校、峰山高校弥栄分校、網野高校間人分校は平成31年度入学までの募集となります。また、学舎制高校は、学舎ごとの募集となります。

丹後の府立高校が目指す教育のポイント

- **生徒の個性と能力を最大限に伸ばす教育を展開します。**
- **丹後の未来を担う人材を育成します。**
- **地域社会の活性化に貢献する学びを深めます。**

各高校が特色ある教育活動を実践することで、生徒の希望進路の実現をしっかり支えていきます。

新しい学びの場「学舎」の導入や新しいスタイルの高校の新設を進めるなど、丹後の高校を一層魅力あるものにしていきます。

地域の企業、自治体、大学との連携による実践的な活動を通じて学びを深め、丹後の将来を担う意識を持った人材を育てます。

丹後の新しい取組

新しい学びの場「学舎」のスタート

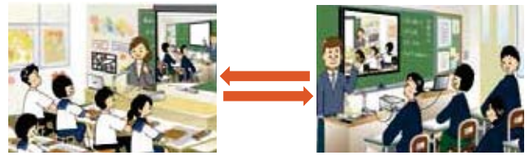
地域に学校を残し、学校、生徒、地域をつなぐ「学舎」【宮津高校・加悦谷高校】【網野高校・久美浜高校】がスタートします。

各「学舎」がそれぞれ特色化を図りながら、「学舎」間での遠隔教育の実施や部活動など、連携した教育活動を行います。

新しい学びの場である「学舎」では、各「学舎」で培った教育活動のノウハウを共有することで、より魅力的な高校づくりを推進します。

ICTを活用した遠隔教育システムの導入を進めていきます。

- 「学舎」間の交流でプレゼンテーション能力の向上を図ります。
- 進学や就職対策の補習、各種講演会など、様々な学びの機会を提供します。
- 授業での導入を検討し、授業研究に取り組みます。



部活動や特別活動での連携を進めていきます。

- 合同練習や合同チームでの公式大会出場など、部活動の充実を図ります。
- 学校行事の合同実施など、「学舎」ならではの連携を検討します。
- 「学舎」間の移動手段など、連携の具体的な内容は決まり次第、お知らせします。

京都フレックス学園構想にもとづく新しいスタイルの高校を新設

自分のペースで「自立心・主体性」を身に付けることができる、生徒のチャレンジをサポートする高校を、峰山高校弥栄分校校地に新設します。

＜概　要＞
- 昼間定時制
- 単位制総合学科
- 宮津高校伊根分校、峰山高校弥栄分校、網野高校間人分校の優れた教育実践を継承

地域創生教育推進プログラム

高校生が地域に愛着と誇りを一層持てる、丹後ならではの教育実践を進めていきます。
- 地元企業や自治体、関係機関などにおけるインターンシップを行います。
- 府教育委員会が協定を結ぶ大学の教授、学生と連携したフィールドワークをはじめとする様々な学習活動を実施します。
- 高校間連携を推進することで、地域活性化に向けた取組をさらに充実します。

新しい学びの場「学舎」

宮津高校

「社会的使命感と青雲の志を持つ人材」を育成します。
智力・人間性・体力の高度な調和を目指し、生き方・学び方を身に付け、一歩前へ踏み出す力を育てます。

【設置学科】
普通科
建築科

【育てる生徒像】
・自主自律の精神を持って学び続ける人
・個性や能力を伸ばし、夢に挑戦する人
・人や社会とつながり、未来を創造する人

特色ある教育活動

■すべての教育活動で基礎・基本を重視し様々な考え方や方法を身に付ける。
■きめ細かな指導で高度な学習内容を習得する。
■探究活動で論理的思考力や、表現力、課題解決能力などを高める。
■第一線で活躍する卒業生や著名人による講座、外部機関との連携事業など、「学びの先」を展望するキャリア教育で「なりたい自分」を発見する。
■充実したICT環境やアゴラ（開放型教室）などで主体的な学習をサポートする。

加悦谷高校

グローバルな視点と地域を愛し地域を創る視点、
これらの二つの大きな意識を合わせ持った人材を
育て、丹後の創生に寄与する高校を目指します。

【設置学科】
普通科

【育てる生徒像】
・地元地域に愛着を持ち、地域創生に貢献する人材
・グローバルな視点で地域を捉えられる人材
・創造的な発想ができる人材
・基礎的な人間力を身に付け、将来にわたって生き抜く力を備えた人材

特色ある教育活動

■課題解決学習の充実（地元大学との高大連携）により、思考力・判断力・表現力などを身に付ける。
■進路目標別プログラム（進学系・アスリート系・キャリア養成系）を展開し、きめ細かな指導によって進路実現を図る。
■英語教育と国際交流を充実させ、グローバルな視点を身に付ける。
■小中学生に対して教えることを経験する活動（体育や英語など）や職場実習（病院や自治体など）を導入し、地域貢献の意識を高める。

網野高校

高い志を持ち、自己の在り方や生き方を探求するとともに、ふるさとを愛し、他者と協働しながら、新たな価値の創生に挑む、国際性豊かな人材を育成します。
−学び続ける力　創造し表現する力　他者を理解し思いやる力　たくましい心と体力−

【設置学科】
普通科
企画経営科

【育てる生徒像】
・普　通　科　　豊かな表現力とコミュニケーション能力を備えた新たな価値を創造する国際人
・企画経営科　　リーダー性と起業精神を備えた新たな価値を創造するスペシャリスト

特色ある教育活動

■担任とチューター（進路相談教員）によるプルアップ面談など、学力向上や希望進路の実現を目指したきめ細かな個別指導
■遠隔授業など、ICTを活用した思考力・判断力・表現力を高める授業
■各種パフォーマンスを通した英語4技能（聞く･話す･読む･書く）を向上させる取組
■「バーチャル市役所」「丹後活性化プレゼンテーション大会」など、産官学連携による課題解決能力・プレゼンテーション能力を養う地域探求や企画運営などの取組

久美浜高校

丹後地域の自然・歴史的財産を活用した新しい時代に求められる
探究心と、丹後とグローバル社会をつなぐ若者力を育成します。
丹後地域での新しい農業と食を創造できる人材を育成します。

【設置学科】
みらいクリエイト科（仮称）
アグリサイエンス科（仮称）
※総合学科から学科改編

【育てる生徒像】
・豊かな人間性と社会人基礎力を身に付け、自ら学ぶ生徒
・丹後を愛し、丹後地域の発展に貢献しようとする生徒

特色ある教育活動

■大学・研究機関、地元企業などと連携した取組や、大学進学に対応した教育内容の充実を図る。
■丹後の自然・歴史文化を活用したフィールドワークによる専門性の高い探究活動により地域の発展に寄与する人材を育てる。
■福祉分野の担い手育成や福祉マインドを育むための教育活動の充実を図る。
■地域の発展に貢献する新しい農業教育の構築を図る。
・ドローンなどの最新機器や IT 技術を活用したグリーンイノベーションを推進
・丹後フルーツを生かしたスイーツなどの開発や健康を支える食文化の創造、大都市圏・海外をターゲットとした付加価値の高い農産物の生産
・環境保全や食の安全などの持続可能性を確保するグローバル GAP（国際基準）の認証取得

海洋高校

地域創生及び雇用促進に向けて、家庭・地域社会及び関係機関との連携を図り、自ら課題を発見し解決する能力を備えた、地域の未来を拓く水産・海洋のスペシャリストを育成します。

【設置学科・コース及び育てる生徒像】

海洋科学科：上級学校進学や公務員就職を目指す生徒

海洋工学科

航海船舶コース：船員・漁業従事者など海に関わる職業を目指す生徒

海洋技術コース：水域環境に主体的に関わるマリンエンジニアを目指す生徒

海洋資源科

栽培環境コース：魚介類の飼育技術を追究し、豊かな海づくりに貢献する生徒

食品経済コース：水産食品の製造・製品開発を学び、地域活性化に貢献する生徒

特色ある教育活動

■海洋科学科　地元漁業者や大学、関係（専門）機関との連携による最先端の研究
ナマコ人工採苗・イワガキ天然採苗の「なぞ」の解明
国際規模での海洋ごみの実態調査と削減に向けての取組

■航海船舶コース　実習船「みずなぎ」を用いた国際（国内）航海実習及び海洋観測、漁業実習
改良網開発による「環境にやさしい漁業」の追究、海技士（航海・四級以上）の取得

■海洋技術コース　水深10mプールなどを利用した作業潜水、測量や施工・管理を学ぶ海洋土木
ICTを組み込んだ「観測装置」の開発及びアマモ場の調査・造成

■栽培環境コース　ホンモロコの増殖（休耕田活用の拡大やサイズ、事業化などの課題解決）
大学、関係（専門）機関などと連携した海洋観測やイルカをはじめとした鯨類調査

■食品経済コース　外部と連携した新製品開発及び各種イベントでの販売、高校生レストラン
「海洋高校 ブイヤベースラーメン」「サメにぎり寿司」などの特産品化

峰山高校

【設置学科】

普通科

機械創造科（仮称）

※産業工学科から学科改編（平成31年度）

求めてやまじ　高き理想を!

～まほろば丹後の「知」と「技」そして「夢」の拠点を目指す学校～

【育てる生徒像】

・文武両道を極める峰高生　～勉強も、部活も、そして学校行事も、まるごと全部！～

・丹後を愛する峰高生　～地域社会としっかりとつながり、確かな郷土愛を育みます！～

・社会に貢献する峰高生　～高い志と柔軟な国際感覚をもって社会に飛翔します！～

特色ある教育活動

■新しい大学入試実施など、新しい時代に対応する教育課程や探究心【知】を育てる教育
例　高大接続の深化、地元人材を活かしたキャリア教育の取組、科学の教室の開催など

■丹後通学圏一のスケールメリットを活かした様々な部活動【技】の充実

■機械創造科（仮称）には、２つの工業に関するコースを設置

・プログレスコース：理工系大学などへの進学により高度な機械・電子工学系技術【知】を学ぶ。

・マイスターコース：地域連携（デュアルシステム）により丹後の誇るべき機械加工【技】の継承者を目指す。

■高い専門性を持つ教員による授業と確かな進路指導により希望進路【夢】を実現

新設高校

（峰山高校弥栄分校校地）

自分のペースで「自立心・主体性」を身に付けることができる生徒のチャレンジをサポートする高校を新設します。

昼間定時制の単位制総合学科（４年または３年で卒業可能）

・昼間定時制だから、じっくりと落ち着いて学ぶことができます。

・単位制総合学科だから、幅広い分野を学習できます。

宮津高校伊根分校
峰山高校弥栄分校
網野高校間人分校

峰山高校弥栄分校校地に開校

今ある校舎を改修し、新しい棟も建設する予定です。

【京都フレックス学園構想にもとづく新しいスタイル】

・３つの分校の優れた教育実践を引き継ぎ、その良さを活かした教育活動を展開します。

・自分の学習スタイルに合わせて、４年または３年で卒業することができます。

・外部機関との連携により、生徒の成長を支援する体制を整えます。

特色ある教育活動

■普通教育のほか、農業、家政を中心とした実習・体験型科目を多く設定し、それぞれの良さを活かした教育を推進

■地域と密接に連携したインターンシップ（職業体験実習）やボランティア活動の実践

■授業のユニバーサルデザイン化（分かる授業、使いやすい資料など）により基礎学力を定着

＜職場体験実習例＞

宮津高校伊根分校

＜農業、家政実習例＞

峰山高校弥栄分校

＜各種大会への参加例＞

網野高校間人分校

今後のスケジュール

丹後の府立高校の新しいカタチは、平成32年度入学生からスタートします。平成30年秋までに、より詳しい教育内容をお知らせしていきます。

学校名	学年（平成 29 年度現在）	平成30年度	平成31年度	平成32年度	平成33年度	平成34年度
宮津高校	中３生	宮津高校１年	宮津高校２年	宮津高校３年		
	中２生		宮津高校１年	宮津高校２年	宮津高校３年	
	中１生			A高校a学舎１年	A高校a学舎２年	A高校a学舎３年
加悦谷高校	中３生	加悦谷高校１年	加悦谷高校２年	加悦谷高校３年		
	中２生		加悦谷高校１年	加悦谷高校2年	加悦谷高校3年	
	中１生			A高校ｂ学舎１年	A高校ｂ学舎２年	A高校ｂ学舎３年
網野高校	中３生	網野高校１年	網野高校２年	網野高校３年		
	中２生		網野高校１年	網野高校２年	網野高校３年	
	中１生			B高校ｃ学舎１年	B高校ｃ学舎２年	B高校ｃ学舎３年
久美浜高校	中３生	久美浜高校１年	久美浜高校２年	久美浜高校３年		
	中２生		久美浜高校１年	久美浜高校２年	久美浜高校３年	
	中１生			B高校d学舎１年	B高校d学舎２年	B高校d学舎３年
海洋高校	中３生	海洋高校１年	海洋高校２年	海洋高校３年		
	中２生		海洋高校１年	海洋高校２年	海洋高校３年	
	中１生			海洋高校１年	海洋高校２年	海洋高校３年
峰山高校	中３生	峰山高校１年	峰山高校２年	峰山高校３年		
	中２生		峰山高校１年	峰山高校２年	峰山高校３年	
	中１生			峰山高校１年	峰山高校２年	峰山高校３年
宮津高校 伊根分校	中３生	伊根分校１年	伊根分校２年	伊根分校３年	伊根分校４年	
	中２生		伊根分校１年	伊根分校２年	伊根分校３年	伊根分校４年
	中１生			伊根分校としての募集はありません。		
網野高校 間人分校	中３生	間人分校１年	間人分校２年	間人分校３年	間人分校４年	
	中２生		間人分校１年	間人分校２年	間人分校３年	間人分校４年
	中１生			間人分校としての募集はありません。		
峰山高校 弥栄分校	中３生	弥栄分校１年	弥栄分校２年	弥栄分校３年		
	中２生		弥栄分校１年	弥栄分校２年	弥栄分校３年	
	中１生			弥栄分校としての募集はありません。		
新設高校（弥栄分校校地）	中１生			新設高校１年	新設高校２年	新設高校３年

お問い合わせ先：〒６０２－８５７０　京都市上京区下立売通新町西入藪ノ内町
京都府教育庁指導部高校教育課　☎０７５－４１４－５８５７

【福井県高等学校教育問題協議会「今後の県立高等学校の魅力化の方策について（答申）（令和２年６月８日）」より抜粋】

３　県立高校の規模の見通し・考え方

平成２０年の本協議会の答申において、１学級当たりの生徒数は３６人程度（職業系専門学科や定時制等においては３０人程度）、１学年当たりの学級数は４学級～８学級を適正規模とし、少なくとも５学級～６学級の確保が望ましいとした。しかしながら、近年では全国的な少子化の進行により地域社会における高校存続の必要性が高まり、１学年３学級以下の学校も全国で約２割存在している状況である。

【参考】令和元年度　全国公立高校の第１学年学級数別学校数

学級数	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15～
全国	90	243	282	448	476	593	420	384	151	39	4	1			2
福井県				10	5	2	3	4	2						

他県においては、高校が地元の自治体や企業等の協力を得ながら、地域の課題解決への取組みや地元の行事等への参画を通して、地域の活性化に貢献し地域を担う人材を育成している例が多く見られる。

さらに近年、国の GIGA スクール構想により、学校教育の ICT 化が急速に進み、タブレット型端末の配備や高速ネットワークの整備、オンライン会議を行うためのソフトの普及等により、複数の学校間での双方向による授業が可能な環境が整いつつあり、必ずしも小規模校を統合する必要もなくなってきている。

これらのことを踏まえ、本県では、今後「１学年４学級以上」にこだわらず、小規模となることが見込まれる高校においても、地元市町の密接な協力を得ながら各高校の魅力化・特色化をさらに進め、今後の社会の変化や地域の状況も踏まえた学科の在り方を検討しつつ、地域のためにできる限り存続させることが望ましい。

【参考】募集定員を踏まえた学級数の見込み

各学校の学級数は令和元年度の実績を元に、単純計算により推計したが、今後、志願・入学実績等により大きく変わる可能性がある。

地区	高校名	学級数 R1	学級数 R16
福井	足羽	5	4
	羽水	8	6
	高志	7	6
	藤島	9	7
	福井農林	4	3
	科学技術	5	4
	福井商業	8	7
坂井	金津	7	5
	丸岡	4	3
	三国	4	3
	坂井	8	6
奥越	大野	4	3
	勝山	4	2
	奥越明成	5	3

地区	高校名	学級数 R1	学級数 R16
丹南	鯖江	4	6
	丹南	4	
	武生	9	7
	武生東	6	5
	丹生	5	3
	武生工業	4	6
	武生商業	4	
二州	敦賀	7	5
	美方	5	4
	敦賀工業	4	2
若狭	若狭	8	7
	若狭東	6	5

令和３年度　福井県立高等学校入学者選抜に係る募集学科および募集定員

［全　日　制］

No.	学校名	学科名			募集定員
1	足　羽	普　通			98
		国際	中国語コース		30
			英　語コース		30
2	羽　水	普　通			290
3	金　津	普　通			217
4	高　志	普　通			160
		普　通 ※１			(89)
5	藤　島	普　通			336
6	丸　岡	普　通			120
7	三　国	普　通			140
8	大　野	普　通			124
9	勝　山	普　通			120
10	鯖　江	普通	スタンダードコース		152
			スポーツ・健康福祉コース	スポーツ専攻 ※5	38
				健康福祉専攻	
			ＩＴ・デザインコース	ＩＴ専攻	38
				デザイン専攻	
		探　究			38
11	武　生	普　通			228
		探究進学 ※２			76
12	武生東	普　通			105
		国　際			60
13	丹　生	普　通			107
14	敦　賀	普　通			96
		文理進学 ※３			60
		商　業			30
		情報経理			30
15	美　方	普　通			80
		生活情報			30
		食　物			30
16	若　狭	普　通			128
		文理探究 ※４			60
		海洋科学			60

※１　高志中学校からの入学定員

※２　武生高校探究進学科は探究理科と探究文科の総称

※３　敦賀高校文理進学科は理数進学科と人文進学科の総称

※４　若狭高校文理探究科は理数探究科と国際探究科の総称

※５　鯖江高校普通科スポーツ・健康福祉コースのスポーツ専攻については、推薦入学者選抜において、体操および陸上競技［駅伝］を募集

No.	学校名	学科名		募集定員
17	福井農林	生物生産		35
		環境工学		35
		生活科学		35
		生産流通		35
18	科学技術	機械システム		36
		情報工学		36
		電子電気		36
		化学システム		36
		テキスタイルデザイン		36
19	敦賀工業	電子機械		30
		電　気		30
		建築システム		30
		情報ケミカル		30
20	福井商業	商　業		78
		流通経済		78
		会　計		39
		情報処理		78
		国際経済		39
21	坂　井	食農科学	農業コース	33
			食品コース	33
		機械・自動車	機械コース	33
			自動車コース	33
		電気・情報システム	電気コース	33
			情報システムコース	33
		ﾋﾞｼﾞﾈｽ・生活ﾃﾞｻﾞｲﾝ	ビジネスコース	33
			生活デザインコース	33
22	奥越明成	機　械		28
		電　気		28
		ビジネス情報		28
		生活福祉	生活コース	30
			福祉コース	26
23	武生商工	機械創造		68
		電気情報		34
		都市･建築		34
		商業マネジメント		68
		情報ビジネス		68
24	若狭東	生活創造		28
		地域創造		28
		電気・機械	電子機械コース	28
			電気コース	28
		ﾋﾞｼﾞﾈｽ情報	経営コース	28
			情報コース	28

［定　時　制］

No.	学校名	学科名	募集定員
6	丸　岡	普 通（昼　間）	40
8	大　野	普 通（昼　間）	30
10	鯖　江	普 通（昼　間）	30
11	武　生	普 通（昼　間）	80
14	敦　賀	普 通（昼　間）	30
16	若　狭	普 通（昼　間）	30
25	道　守	普 通（午　前）	40
		普 通（午　後）	40
		普 通（夜　間）	30

［通　信　制］

No.	学校名	学科名	募集定員
25	道　守	普　通	120

外国人生徒等特別選抜に係る募集学科および募集人員

［全　日　制］

No.	学校名	学科名		募集人員
1	足　羽	国際	中国語コース	10名程度
			英　語コース	
23	武生商工	機械創造		3名程度
		商業マネジメント		

資料２－10

県立高等学校入学者選抜の概要

	全日制課程・定時制課程				通信制課程
	推薦選抜	スポーツ・文化芸術 推薦選抜	特色選抜	一般選抜	
R3実施校数	33校	19校	15校	49校（全44・定5）	1校
R3受検状況	・受検者数　2,285名 ・入学許可予定者数　1,966名 （スポ文を含む）	・受検者数　144名 ・入学許可予定者数　132名	・受検者数　3,827名 ・入学許可予定者数　1,118名 （スポ文を含む）	・受検者数　6,712名 ・入学許可予定者数　5,860名 （以下、二次選抜） ・受検者数　99名 ・入学許可予定者数　87名	・受検者数　127名 ・入学許可予定者数　127名 （以下、二次選抜） ・受検者数　19名 ・入学許可予定者数　19名
出願条件等	志望する動機が明確であり、出願先高等学校が示す推薦要件にふさわしく、適性、興味･関心および学習意欲を有する者のうち、中学校長の推薦を受けた者。出願は、１人１校、１課程、１学科または１科限りとする。	志望する動機が明確であり、出願先高等学校が示す推薦要件を満たし、適性、興味･関心および学習意欲を有する者のうち、中学校長の推薦を受けた者。出願は、１人１校、１課程、１学科または１科限りとする。	志望する動機が明確であり、適性、興味･関心および学習意欲を有する者。出願は、１人１校、１課程、１学科または１科限りとする。	出願は、１人１校、１課程、１学科または１科限りとする。 ただし、出願しようとする県立高等学校の同一の課程に２つ以上の学科または科が置かれる場合にあっては、これを第２志望または第３志望とすることができる。	他の課程および県立高等学校との併願はできない。
入学定員に占める割合等	募集定員の専門学科50%、総合学科40%、普通科30%を上限として教育委員会と協議し決定	推薦選抜・特色選抜の募集枠の50%を上限とし、実施校が、１指定競技・種目・部門につき10名以内で設定	募集定員の専門学科50%、普通科30%を上限として教育委員会と協議し決定	募集定員から推薦・特色・スポーツ・文化推薦選抜の合格者数を除いた人数	別に定員を示す。(320名)
選抜方法の概要	出願先高等学校長は、中学校長から提出された個人調査報告書および推薦書等の内容ならびに面接、作文または実技検査の結果を資料として、総合的に判定し、推薦選抜における入学許可予定者を決定するものとする。	出願先高等学校長は、中学校長から提出された個人調査報告書およびスポーツ・文化芸術推薦選抜推薦書等の内容ならびに各検査の結果を資料として総合的に判定し、スポーツ・文化芸術推薦選抜における入学許可予定者を決定するものとする。	出願先高等学校長は、志願者から提出された志願理由書および中学校長から提出された個人調査報告書等の内容ならびに口頭試問、小論文、総合問題または実技検査の結果を資料として、総合的に判定し、特色選抜における入学許可予定者を決定するものとする。	出願先高等学校長は、個人調査報告書、学力検査実施教科等の成績を資料として、高等学校教育を受けるに足る者を選抜し、入学許可予定者を決定するものとする。	出願先高等学校長は、提出された個人調査報告書および面接の結果を資料として、総合的に判定し、入学許可予定者を決定するものとする。
主な日程	１月末　出願 ２月上旬　検査 ２月中旬　合格通知	１月末　出願 ２月上旬　検査 ２月中旬　合格通知	１月末　出願 ２月上旬　検査 ２月中旬　合格通知	２月末　出願 ２月末～３月上旬　出願変更 ３月上旬　学力検査 ３月中旬　合格発表 ３月下旬　二次選抜	３月中旬　募集 ３月中旬　合格発表 ３月下旬　二次選抜